

# つる子どもまつり

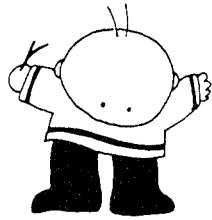
早稲田大学教授で歌人でもある佐々木幸綱氏の随想に次のようなものがある。(要旨)

「幼い頃にぜひ体験しておいた方がいいことがある。その最低限のものは次の3Kである。3Kというとは、現代の若者に知られる職種。危険、汚い、きつい。3Kを思い出すかも知れないがそうではない。殺す、壊す、怪我するの3Kである。」

数日前、アメリカのある州で行われたカエル跳び大会を伝えるニュースをみた。一メートルほど跳躍するカエル。飼い主がおどかしても微動だにしないカエル。その場面の後、その衝動的な事件は起こった。椅子の上に立って、まったく動かないカエルを見ていた女の子が、突然、びよんとカエルの上に飛び降りたのだ。カエルは拳ぐらいの大きさだったが、もちろんつぶされた。女の子はとうとうと自分が何をしたのか分かっていないらしく、死んだカエルの上から足をどけると、動かなくなったカエルを見て、ただにこにこ笑っていた。これがお笑い番組なら―そうです、わたしが変なお嬢さんです―といったギャグですくわれるのだ

が、ニュース番組である。なんとも暗く、白けた後味だけが残った。誰だっけ攻撃的な気分になることとはある。私だっけ、思い通りにならない犬の頭をなぐったり、言うことを聞かない息子に対して攻撃的に罵声をあびせかけたりする。私と女の子の差は、私が、犬をなぐってでもなぐり殺しにしないよう手加減し、息子をののしっても最

終的に彼のメンツをつぶさない程度の配慮をしている、たったそれだけの差だ。この差はどこで生じるのか。たぶん、自分の内部にある攻撃性、残虐性を認識しているかいないかによる、と思われる。手加減、配慮は、自分の内部の攻撃性、残虐性を野放しにしておくが大変なことになる、という自身が自身に発する警報によってなされる。



つまり、あの女の子の内部には、そうした警報を出す仕組みができていなかったのか、警報が出てもそれを無視したかのどちらかだったのである。あのきょとんとした表情からして、彼女は、自分の中にどれほど激しい攻撃性が潜んでいるのか、その時まで知らなかったのだらう。ただ、あの事件の後、彼女は自身の内部の危険に気づいたはずである。自身の内部に気づけばシステムは作られる。

この事件を見て、私はコンクリート詰め殺人の少年たちをはじめ、警報システムが欠如していたために手加減、配慮ができなかった幾人をも思い出した。命あるものを殺すのはいいことではない。殺さない方がいいに決まっている。しかし、人という動物が自身の内部の残虐性に真に気づくためには、現実自分が攻撃し、殺してみても、その現場で相手の死の実際を実感すべきなのだ。アリの穴に水を注ぎ、トンボの羽を引きちぎり、カエルの皮をひんむき……。彼らの苦しむさまを手に見て、はじめて自身の内部の攻撃性、残虐性を恐れるようになるのだ。

幼い頃に、殺しを体験すべきだ。そして壊しを体験すべきだ。さらに言えば、その代償としての怪我也も体験しておいた方がいい。以上長くなってしまったが、こ

の一見逆説的な随想は、現代の子どもを見るにつけ正鶴を射ているので引用させて戴いた。

今、文部省では子どもにけんかを勧めている。教育ママの悲鳴が聞こえてきそうだが、この文部省の方針も、発想の原点は佐々木氏の論に帰着するであらう。

先日、学校で、子どもが校庭の隅の木にある野鳥の巣から雛を略奪した。担任の先生は、困ったり、注意したりで大慌てだったが、何でも知りたい、体験してみたい子どもたちにしてみればまったく自然な行為ともいえる。

その雛は死んでしまうかもしれないが、子どもたちの中には他のことでは経験することのできない、弱いものへの慈しみの心が生まれるに違いない。

(元都留市教育委員小林次郎氏)

## 地方教育行政功労者として 文部大臣表彰



小林次郎氏

七月十三日東京日比谷公会堂において、元教育委員小林次郎氏が全国二千名余りの教育長の見守るなか、百六十三名の地方教育行政功労被表彰者を代表して、文部大臣より表彰状が授与されました。小林氏は、昭和五十年七月都留市教育委員に任命され、平成三年六月三十日をもって退職。その間四期、十六年、都留市教育委員(委員長職五年)として教育行政に貢献。特にその顕著な功績が認められ、この度の表彰となったものです。

## つる子どもまつり関連企画 第8回芸術鑑賞 のお知らせ

私達つる子どもまつり実行委員会では、今年で第8回をむかえる芸術鑑賞を10月4日(日)に行います。今年の公演作品は人形劇団「ひとみ座」の「南の島の少年マウイチキチキ」です。

TVで親しまれてきた「ひょっこりひょうたん島」「人形劇三国志」等を手掛けてきた「ひとみ座」が、歳月をかけて公演を続けてきたのがこの作品です。最近では海外公演をはじめ、多くの日本各地での公演を行っています。

この「マウイチキチキ」独自の人形と、不思議な民族楽器の音色のつくりだす「南の島」へ一度おこしになりませんか。問合先 ☎(45)5087 鈴木